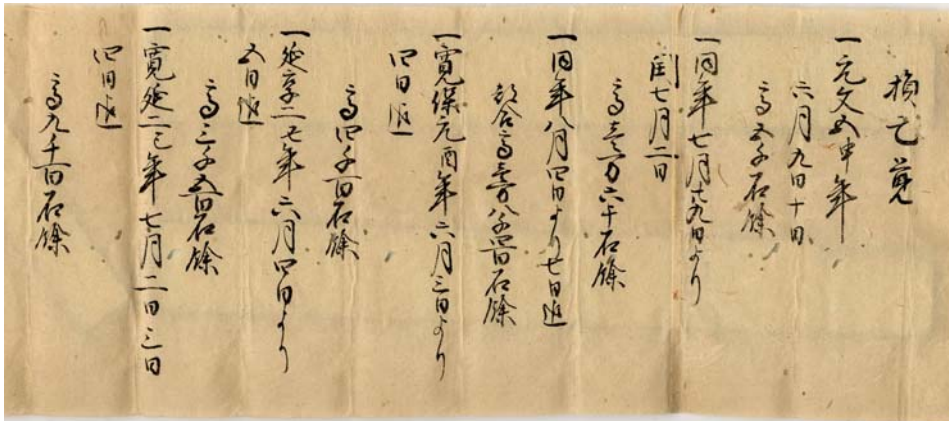


## みなづき 水無月の危機

今年（平成19年）の7月1日は旧暦では5月17日、そして14日が旧暦6月1日となります。旧暦の6月は水無月という別名とは裏腹に、現在でも梅雨末期の豪雨に対する警戒が怠れない時期です。



市史第4巻近世資料に掲載された61号史料は、江戸時代の宝暦13（1763）年に三田藩で作成された水害に関する珍しい記録です。この記録からは元文5（1740）年から寛延2（1749）年までの10年間に大規模な水害が6回も発生していた

### 洪水による被害額の記録（江戸中期頃）

ことがわかります。内訳は6月が3回、7月が2回そして8月が1回です。いずれも旧暦ですので6月は梅雨末期の豪雨、残りが台風による被害であると考えられます。これらの水害による被害は、三田領の石高（公定収穫高）約3万石に対して1年あたり3500～1万8000石と見積もられており、当時の三田の人々にとって水害はまさに死命を制する問題であったことがうかがわれます。

一方、同書の191号史料は史上有名な「天保の大飢饉」に際して、現在の高平地区の大半を支配した麻田藩に提出された、困窮者に対する救い米の貸し付け願いです。飢饉の発端は天保4（1833）年の不作ですが、実際の危機は翌5年の夏に訪れたのです。すなわち田植えの季節を経て経済的に追いつめられ、さらには端境期で食糧にも窮する～場合によれば種籾までも食べ尽くしてしまっている～という惨状が旧暦6月頃に至って表面化するのです。

本来なら田植えを終えて「さなぶり」や夏祭りで一息つける時期でもありますが、かつての旧暦の6月頃は常に災害をめぐる危機と背中合わせの季節だったのです。さまざまな危機管理が進んだとはいえ、文字通り天災は忘れた頃にやってきます。先人たちが味わってきた旧暦水無月の頃の苦労を現代に生きる私たちも教訓としたいものです。